

日刊 動労千葉

82.11.10

No. 1191

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五（六）（公衆）〇四七二（二二）七二〇七

支部通信員・発

第五回津田沼支部定期大会は、十一月八日、十三時より電車区講習室で開催された。

当局の先兵・「本部」革マル一掃を

＝山下支部長あいさつ＝

大会は、行方代議員を議長に選出し進められた。冒頭あいさつに立った山下支部長は、「われわれをめぐる状況は、これからが正念場だ。現協、乗車証問題で当局に屈服し、国鉄労働運動破壊の先兵となっている動労『本部』革マル一掃の闘いをさらに強化しよう。軍事大国化へつき進む日本帝国主義に対し、三里塚十・一の総決起の力をもって反撃するとともに、広島・東京・大阪で示された広範な反核を闘う人民と結合し、反戦・反核の大きなうねりをつくり出そう。」「八三年政治決戦とりわけ船橋から立候補する中江顧問の必勝のため津田沼支部は最先頭に立ちとう。」とあいさつ。

つづいて本部山口副委員長から、とくに第二臨調・緊急十一項目攻撃の激化に対し「当局は、デッチ上げをもとおして処分を狙っている。仙台での不当処分はその例である。われわれは、個々人に対する分断、処分攻撃を許さない強固な組織体制を確立し、攻撃をハネ返そう。当局の先兵となった動労『本部』革マルを許すな」とのあいさつが行われた。

労働運動と市民運動の結合こそ

反戦・平和の道

＝中江顧問があいさつ＝

続いて立った中江顧問は、「厳しい情勢の中でこそ労働組合の真価が問われる」「動労千葉の任務は、全労働者の総決起をうながし、日本労働運動の右傾化を引きもどすところにある」と長い労働運動の経験にふまえて提起するとともに、来春の船橋市議選に対し「短期間で苦しい闘いではあるが勝利へむけて奮闘する。そのために船橋市を非核・憲法擁護・平和都市宣言の街に」を合言葉に署名運動を行うなど、反核・護憲・平和の広範な市民・住民の運動をつくりだしたい。「労働運動と市民運動の結合の中こそ真の反戦・平和の道がある。」と熱っぽく訴えた。

「本部」革マルの敵対を粉碎し、 ゼネスト貫徹・中江選挙必勝へ

大会延期承認の後、経過報告、決算報告さらに八二年度方針案、予算案が執行部より提起され質疑討論に入った。

質疑は、(1)乗車証問題(2)京葉線開業問題(3)仲裁凍結などに関連したゼネストをふくむ闘いの方向性について(4)中江選挙必勝体制確立についてなどを中心に行われた。この中で、すでに日刊動労千葉で明らかにされた乗車証問題での動労「本部」革マルの屈服がより一層鮮明に



82年度新執行部を代表して山下支部長(左端)が鮮明な決意を表明した。

されることも、京葉線開業にからみ、すでに当局の広域配転攻撃に積極的に協力し、革マルのセクト的利益のみを追求するという動労東京・革マル松崎の反労働者の動きなども明らかにされた。

また、ゼネスト問題については、「動労『本部』革マルはスト庄役に走り回っているが、下部労働者の怒りは強く、総評内でも自治労・日教組などが具体的なスト方針を決定するなどの動きが始まっている。

動労千葉は、ゼネスト実現へむけた情宣活動の強化をはかるとともに、他労組と連携を強化し、適時、総決起集会や独自の闘いをも準備し体制をつくる。」との方向が示された。

中江選挙については、組織戦であると同時に国鉄攻撃への反撃でもあり、加えて、動労千葉の反合・三里塚路線の拡大の好機でもあるとの視点をもち断固闘いぬくことが確認された。

こうした活発な質疑討論を通し、八二年度方針、予算、スローガンを満場一致で確認したのち、新旧役員あいさつ、永島青年部長の音頭による組合歌合唱、最後に山下支部長の団結ガンバロー三唱で大会は成功裡に終了した。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！

支部執行委員長	山下 幸四一	電運士
支部副	綾部 光男	三六
書記	吉岡 一三	三一
書記次長	高石 正博	三七
執行委員長	深見 四郎	四〇
	高橋 邦彦	三六
	伊藤 詔一	四〇
	川口 春雄	三五
	椿 勇	三一
	川崎 昌浩	二四
	永島 務	二四
特別執行委員		電運士